

山形県連小 会報

特 集 号

発行日 平成28年 8月28日
 発行者 山形県連合小学校長会
 田 中 利 幸
 山形市木の実町12-37
 県教育会館(大手門パルズ)

第70回 山形県連合小学校長会研究協議会開催される



大 会 日 程

(6月10日(金) 山形市 国際交流プラザ)

9:30 ◇受 付

10:00 ◇全体会

○役員紹介

1 開会のあいさつ

遠藤 倫夫 実行委員長

2 国歌・県民歌斉唱

3 会長あいさつ

田中 利幸 会長

4 来賓あいさつ

山形県教育委員会教育長

廣瀬 渉 様

5 来賓紹介

高橋 禎 幹事長

6 大会宣言

村上 宏幸 研修委員長

7 閉会のあいさつ

黒木 佳昭 H29年度実行委員長

高野 博 H30年度実行委員長

○諸連絡

10:40 (休 息)

10:55 ◇研修Ⅰ

講演『目は世界に 心はふるさと』

一次の世代に何を伝えるか』

講師 田勢 康弘 氏 (ジャーナリスト)

12:30 ◇昼食・休憩

13:30 ◇研修Ⅱ

分科会

16:00 ◇閉 会





会長あいさつ

山形県連合小学校長会

会長 田 中 利 幸

あらためまして、会場の皆様、おはようございます。「第70回山形県連合小学校長会研究協議会」が、県教育庁教育次長 阿部 善和様、並びに市町村教育委員会協議会会長 荒澤賢雄様、そして歴代の県連小会長様をはじめ、多くのご来賓の皆様のご臨席をいただき、ここ山形国際交流プラザにおいて開催できますことを、会員の皆様とともに喜び申し上げます。また、本大会を開催するにあたり、日頃から温かいご指導とご支援を賜っております山形県教育委員会、並びに各市町村教育委員会、関係諸団体、そして、大会の成功に向け、さまざまな心配りのもと、周到な準備を進めてこられた西置賜地区校長会の皆さまに、心から敬意と感謝を申し上げます。

山形県連合小学校長会は、県内各市町村、また県内11地区に組織されている校長会の連合体として存在しており、それぞれの校長会に伝統や文化、受け継いでおられる考え方があります。今年度の学校の統廃合により、小学校は6校が減少し254校となりましたが、その違いをよさとして考えを出し合い、新たに仲間としてお迎えした48名の校長先生と共に、力を合わせていくことが、各学校経営の充実と県内小学校教育の振興につながるものと考えます。

昨年12月に中教審は、大量退職・大量採用による、年齢や経験年数の不均衡を背景に、「学び続ける教員像」を掲げました。学習指導要領の改訂や学校の組織体制の整備に伴い矢継ぎ早に打ち出される教育改革に加えて、5月に提出された教育再生実行会議の第9次提言では、障害や不登校、学力差等課題がある子どもへのきめ細かい対応や、次世代のリーダー育成等の内容が示されています。こうした、新たな教育課題に対するリーダーシップやマネジメント力を磨き研鑽を積むために、自らの意志で集い、情報交換を通して進むべき方向を探っていく。そうした、学び続ける校長先生方を支える県連小でありたいと考えます。

その鍵は、各専門委員会活動の充実にあります。県連小は、「喫緊の課題への組織的な対応力」と「発信する県連小」を目指して、組織改編と調査研究の見直しを図り、昨年度「対策、研修、生徒指導」という新たな枠組みで専門委員会がスタートしました。生徒指導委員会が、新しい方針での調査研究の委託を受け、単年度での調査と分析、情報発信から提言までを行っていただきました。この提言の浸透を図ることが、まず、その方策の一つだと考えます。

これは、昨年度の「県連小研究紀要 第59集」です。ネット接続機器使用の課題と対応についての調査結果と生徒指導委員会からの提言が掲載されています。個々に読むだけでなく、各校長会で研修会の資料として等活用し、提言の浸透を図ってはいかがでしょうか。また、第57集と58集には、『教職員の世代交代と学校の統廃合が進む中での学校経営の在り方を探る』と題した調査研究が特集されています。第54集と56集には、『子どもと向き合う時間の確保をどう図っていくか』をテーマに、調査結果と実践が掲載されています。これらは、いずれも、「校長先生方の実体験を基盤」とし、「校長としてどう対応するか」という視点でまとめられており、今まさ

に、私たちが直面している課題への解決のヒントが発信されています。せっかくの、この私たちの財産を、さらに活用してはと考えます。

二つ目として、私たちは、対策委員会を中心に、本県教育のあるべき姿を模索し、家庭や地域はもとより、教育委員会や関係機関とも連携して、問題解決に努めていかなければなりません。厳しい現状や、次々と提示される教育改革への対応は、子どもや現場で働く教員に反映されてこそ、意義ある取り組みであると言えます。先ほど紹介した研究紀要 第57集には、調査結果の中に、「講師として勤務している方の経験を、教員採用に反映させてほしい」という要望が挙げられています。こうしたことも要因の一つとなつて、この度示された「特別採用枠の拡大」につながっていると考え、感謝しております。

そして、三つ目として、各地区研修委員の方々パイプ役を担ってくださっている本研究協議会は、私達校長の経営力を高める最大の研修機会です。全連小主題と、6教振の理念を受けた、新たな副主題のもとに実施する研究協議会の、2年目となります。西置賜地区校長会の方々は、遠藤倫夫実行委員長をはじめ、16名という少ない会員数で取り組んでおられますが、提言発表を大事にした分科会の進め方や、参加型協議会としての総括の仕方、事務作業を軽減するホームページの活用等、効率化や今後につながる見直しを図ってくださっています。また、本研究協議会の成果は、来年度開催する「東北連小 山形大会」につながります。2年前に県実行委員会を立ち上げ、山形地区、上山地区、東村山地区を主管地区として、黒木佳昭実行委員長、最上博之事務局長を中心に、準備を進めています。研修の充実を何よりも大切にしながら、山形駅周辺を会場としたコンパクトで、かつ「おもてなしの心」を表す大会をめざしています。主管地区のメンバーだけでは、どうしても賄い切れないところがありますので、研修委員会を中心に、各地区からのご支援をお願いいたします。

さて、この度発生した熊本地震被害への対応についてですが、各地区理事の方々を通して連絡したように、全連小・東北連小ともに、「統一した対応は取らず、各県校長会の判断に任せる」という見解でした。

そこで、副会長の方々に相談したところ、「同じ仲間として、お見舞いの気持ちを表したい」ということにまとめ、県連小本会計（予備費）から見舞金として10万円を、直接、熊本県校長会に送付いたしました。これも、喫緊の課題に対する県連小の組織的な対応力であり、皆様のご協力に感謝いたします。

最後になりますが、学び続ける機会の大切さを認識し、研修を深めることが、役割を担ってくださっている方々の、労苦に報いる、最大の成果だと考えます。それぞれの地域に根ざした、活力ある教育活動の実践をもちより、参加会員相互の学校経営に触れるこの機会を大切にしながら、実りある研究協議会になることを願い、挨拶いたします。本日は、どうぞよろしくお願い申し上げます。



来賓あいさつ

山形県教育委員会

教育長 廣 瀬 渉
(代読 教育次長 阿部 善和)

第70回山形県連合小学校長会研究協議会の開催にあたり、一言ご挨拶申し上げます。

校長先生方におかれましては、日頃から本県小学校教育の充実・発展のためにご尽力いただいておりますことに、まずもって深く感謝申し上げます。

また、この度、ご勇退なされました先生方のご功績に対しまして、心より敬意と感謝を申し上げます。

さて、本協議会は70年目という節目の年を迎えられました。発足から、このように教育へのひたむきな取組みを連綿と続けられていることに改めて敬意を表します。

この70年の間には、様々な課題が取り上げられて参りましたが、今の子どもを取り巻く環境は、大きく変化している状況にあります。

少子高齢化や核家族化を伴う人口減少の進行だけでなく、グローバル化やITの進展という大きな変化が急激に進んでおります。そのような社会の中で、主体的にたくましく生きぬいていく人間の育成が、教育の役割として益々重要になってきております。

昨年度は、本大会において6教振の方針に沿った教育活動の展開をお願いいたしました。

ご承知のとおり、6教振は、5教振以来これまで本県が進めてきた「いのちの教育」の理念を踏まえ、それを基盤としながら、知徳体をバランス良く身につけ、総合的な力として高めることを目指しております。

このことについて、各校において真摯な取組みがなされ、着実に前進しておりますことに改めて御礼申し上げます。

本年度、本県では、「社会を生きぬく基盤となる確かな学力を育成する」こと、「変化に対応し、社会で自立できる力を育成する」ことを目指して、「山形の未来をひらく教育推進事業」を展開し、小・中・高等学校を通した「探究型学習」を、より推進して参ります。

また、各校における探究型学習の効果を検証し、その結果を授業改善と教育施策に還元することをねらいとして、「山形県学力等調査」を、県内全小学

校5年生及び中学校2年生において10月5日に実施します。授業改善と評価を適切に結びつけ、効果検証を図りながら事業の推進に努めて参りたいと考えます。

さらに、グローバル化に対応した外国語教育の一層の充実を図って参ります。グローバル化が進む社会にあっては、山形県人、日本人としての自覚や文化に対する深い理解を前提に、国際社会の一員として、自らの考えや意見を発信し、異なる文化を持つ国の人々と豊かにコミュニケーションできる能力が必要です。

今年度は、鶴岡モデルとして取り組んでいただいております鶴岡市で、実際に地元の魅力を発信する取組みを行う予定であります。今後、先進的に取り組まれている成果を広く普及して参りたいと考えております。

教職員の人事評価については、本年度本格実施となりましたが、大きな混乱もなく、現在進められております。これまでの試行の取り組みがあったところとは言え、この4月、5月は、面談時間の確保を始め、多くのご苦勞があったことと拝察します。この評価が軌道に乗るためには、もう少し時間がかかるかと思われますが、教職員一人一人の「資質、意欲、能力の向上」を図れるよう、教職員へのご指導をお願いいたします。本県教育委員会しても、教職員全員で信頼される学校を作っていける仕組みとなるよう、皆様の声を積み重ねながら進めて参ります。

信頼される学校づくりに向けた取組みには、服務規律の徹底はもとより、授業改善や教職員の意欲、資質の向上など、より質の高い教育活動が求められます。6教振を中心としながらも、これまで同様、着実な学校経営を展開していただくようお願いいたします。

最後になりますが、これからの校長先生方のご健勝と山形県連合小学校長会の益々の充実と発展をご祈念申し上げ、挨拶いたします。

講演



演題

「目を世界に 心はふるさと — 次の世代に何を伝えるか」

講師：ジャーナリスト 田勢康弘氏

プロフィール

1944年中国黒龍江省黒河で生まれる。西置賜郡白鷹町出身。

中学1年の3学期、父親の死にともない青森県から父母の出身地白鷹町へ移り、荒砥中学校（当時）に3か月在籍。以来、ずっと白鷹町出身と称している。

早稲田大学政治経済学部政治学科卒。日本経済新聞社で42年間、政治担当の記者、編集委員、論説委員、コラムニストをつとめる。

途中、ワシントン支局長。2006年から4年間、早稲田大学教授。それ以前に東大講師、米国ハーバード大学上席研究員。2008年から8年間T V東京系列で報道番組「田勢康弘の週刊ニュース新書」キャスター。

現在、ジャーナリスト、田勢康弘事務所代表、一般社団法人「心を伝える歌の木を植えよう会」代表、「日中ジャーナリスト会議」日本側 座長。

代表的著書に「政治ジャーナリズムの罪と罰」、「島倉千代子という人生」(ともに新潮社)、「総理の演説」(バジリコ社)等。

白鷹中学校 校歌『友よ』



作詞：田勢 康弘
作曲：山崎 ハコ
編曲：若草 恵



講演会

「目を世界に 心はふるさと」
に参加して

飯豊町立第二小学校 土屋 賢 寿

田勢康弘先生のお名前は以前からは知っていましたが、勤務校と近隣の白鷹中学校の校歌を作詞されたことで、身近な感じがしていました。県連小研究協議会でもご講演いただけるとお聞きし、事前にインターネットを検索してみました。

経歴には、「中国の黒竜江省生まれ。父の仕事の都合で小学校5年から中学校1年まで青森市久栗坂で過ごし、父の死をきっかけに当時母親の実家のあった山形県荒砥町（現在の白鷹町）に転居。その後一家で上京し、早稲田大学卒業」とあり、社会人となられてからの新聞・テレビ・大学等でのご活躍の様子が記されていました。

戦争・難民・テロや経済・国境等の世界的な問題が毎日報道され、国内でも地震や洪水からの復興・地方消滅・憲法等の多様な課題がある今、先生がどんなお話をされるのかとても興味がありました。

また、中学1年生のわずか3か月しかいなかった白鷹町を「出身地」と言うくださるのはなぜだろうという不思議も生まれ、いつもより少し背筋を伸ばして講演の始まりを待ちました。

初めにわかったのは、「白鷹町出身」の所以でした。わずか3か月ながら、多感な時期に荒砥中学校で担任して下さった先生との出会いが、永く心を支えるものになった事。しかも、講演当日にはその担任の先生が会場にお出でくださり、静かに田勢先生のお話しに耳を傾けていらっしゃいました。

出会いの妙、時を超えて繋がる心の素晴らしさを感じるとともに、「あなたは成長の途にあるたくさんの子ども達と、どんな出会いをしていますか。」と問われているような気がしました。

また、農業の魅力を再認識し、農業がもうかる仕組みに転換する視点や、負の遺産を生み出してしまった原子力利用の現状を直視し、廃炉ビジネスを

立ち上げていく必要性等、「できないと思っている事」を「できる」にする発想にも考えさせられるものがありました。

控え目で、明確な意思表示があまり得意でない日本人については、よく話題になるところですが、講演の中で触れられた「教室の端に陣取って、自らをほとんど主張しない日本人留学生のエピソード」は、私たちが育てている子ども達の未来の姿であるかもしれません。

考えて見ると、私達自身も、あまり出しゃばらないよう抑えている部分があります。この日本人の姿勢が逆に世界で活躍することの足かせになっているようにも思えました。教員にとって世界で活躍できるような子どもを育てていくことは、夢であり目標でもあります。そのためには、物事を鵜呑みにするのではなく、根拠をもとに自分なりの考えを構築していく力、そして自分の信念や考えを自ら発信する主体性やたくましさを育てていくことが必要であると感じました。

講演の中で、映像とともに紹介いただいた白鷹中学校の校歌は、田勢先生の白鷹町や山形県を大切に考えて下さっている想いと、無限の可能性を秘めた子ども達への温かい励ましのメッセージとして伝わってきました。特に「目を世界に 心はふるさと」という歌詞を最も入れたかったということから、世界に目を向けて自分の夢に挑戦していくことと、ふるさとを思い地域に貢献していくことは違った道ではなく、この2つのことを子ども達には共に大切にしてほしいというメッセージが含まれていると感じました。私が勤務する学校の教育目標は、「ふるさと大好き すすんで勉強する子ども」です。「目を世界に 心はふるさと」と大きく重なる部分があると自分なりに理解しました。今日の講演の内容を本校の子どもたちにも教育目標と関わらせながら伝えていきたいと考えています。

今回の講演は田勢先生のジャーナリストとして活躍された広い視野とふるさと白鷹町を大切に思う心に裏打ちされた、教職に携わる我々への示唆性に富むメッセージで、日々の実践につなげていきたいと思いました。



第 1 分 科 会

経営ビジョン

○子どもたちの夢や希望を育む創意と活力に
みちた学校経営ビジョン

～上山スタイルの学校経営を通して～

上山市立中川小学校 藤 原 由 美

研究協議のまとめ

(趣旨)

学校は、子ども達の夢や希望を育み、その実現に向かう力を育成しなければならない。そのために、校長の指導のもと、創意あふれる学校づくりが必要となってくる。本分科会では、子ども達が生きる未来社会を見据えた明確な学校経営ビジョンを持ち、創意と活力に満ちた信頼される学校経営推進の在り方を明らかにする。

(研究協議内容)

《協議の柱》

◎子どもたちの将来を見すえた2本立ての学校ビジョンのあり方

◎教職員の意欲を引き出し、9年間で育てる意識を高める教育活動の推進

《協議内容》

○小中連携のあり方における校長の役割について

- ・校長として連携を行うことに伴う「メリット」「デメリット」をしっかりと把握し、先ずは、校長間で学校ごとの考え方の違いを語り合い歩み寄り進めることが大切である。
- ・「子どもが成長する活動になっているのか」という視点を忘れず、それを基に会議や内容の精選を行い、場合によっては、家庭や地域に協力を求めることも大切である。

○「9年間で子どもを育てる」という教職員の意識を高めるため校長の役割について

- ・「木を見て森を見ず、森を見て木を見ず」とならないように、バランス感覚を養うために、方向性を示したりや視野を拓けるようアドバイス（講話・校長通信等基に）を行うことが大切である。
- ・一人一人の教職員をみとり、それぞれが行っている教育活動について価値づけし、自信を持たせ、感謝することが大切である。
- ・学校目標具現化のための教育活動であることをしっかりと示し、組織を活用することと共に何らかの仕掛けを行うことが大切である。

(記録 上山市立南小学校 岡村 廣)

第1分科会に参加して

鶴岡市立加茂小学校

樋 坂

聡

学校の特色や指導の重点、教職員の協働等、学校経営の充実に向けて取り組むべきポイントの多い中、小中連携の視点から「学校の独自性あふれる経営ビジョンの策定・実践」と「小中連携を柱とした経営ビジョンの策定・実践」という2つの柱立てによる経営を通し、9年間で子どもを育てる教員の意識を高めることができた実践に多くを学びました。

学校は、それぞれ独自の教育目標を掲げ、特色ある教育を推進しています。各学年や学級でも、子どもの実態に応じそれぞれに工夫して日々教育にあたっています。これはどこにでもある当たり前の学校風景のようですが、その実践に学校としてきちんと1本筋が通せるかどうかは、実は大変難しく、かつ根本的な課題です。

そんな中でA学校独自のビジョン B小・中連携の2本立ての経営ビジョンを職員で共有し実践しているということは、まさに全職員の意識と実践力の賜物と言えます。まず校内をかため、そして小中間の連携に広げていく取組に思いを馳せた時、「上山スタイル」の力強さをあらためて感じました。

この取組を充実させるための手立ての中核であろう「かみのやま子ども宣言」や各中学校区の「具体的行動」を評価し共有する際、目に見える成果だけでなく、取組の過程で見られる子どもの姿に価値を見出していくことが「夢と希望を育む経営ビジョン」につながるのではないかと思います。



第 2 分 科 会

組 織 ・ 運 営

○学校経営ビジョンの具現化を図るマンパワーの活用

山形市立東沢小学校 小 松 和 彦

研究協議のまとめ

(趣旨)

学校経営ビジョンの具現化を図るためには、人的措置や組織体制の充実が最重要であるととらえ、組織の活性化・活力ある運営のあり方を探るための切り口として「マンパワーの活用」に焦点を当て、市全体の現状と課題、成果と今後の展望等を整理した。視点ごとに整理したことにより、その効果を自校の実情を勘案しながら取り入れやすくなった。また、状況に応じた教科担任制や加配教員活用の工夫により、組織運営の活性化や組織力の向上につながっている。教職員一人一人のマンパワーをいかに引き出し、職員同士を校長がどうかかわらせるかによって、相乗効果が生まれる。こうしたマンパワーのより効果的な活用が図られることが重要であろう。

(研究協議内容)

協議の柱：「職員個々の持ち味を活かし、協働性と相乗効果を高める校長のリーダーシップ」

グループ別協議（主な協議内容）

- 教職員の専門性を高め、教科担任制により、各教師の持ち味を活かし、得意教科で学力を向上させ、複数の目で子ども理解を深め、子どもの心の安定を図ることも可能である。効果は大きい。
- 各学校の実情に応じて、個々の教職員の意識を高く持たせ、組織の作り方や運用を工夫していくことが大切である。
- 新採教員や若手・中堅教員を育て、ベテラン教員の良さを生かす校長のリーダーシップが益々重要である。
- 市町によって配置状況に差がある。人員や教員の質の確保、担任力を高める努力を続けたい。
- クラス替え・担任替え等は、リスク回避から授業改善・学力向上につながるものにしていきたい。

(記録 山形市立第九小学校 岸 純一)

第2分科会に参加して

川西町立高山小学校 衣 袋 慶 三

学校経営ビジョンの具現化を図るためには人的措置や組織体制が重要であり、組織の活性化・活力ある運営の在り方を探る切り口として「マンパワーの活用」がそのカギを握る。この視点から山形市小学校長会から発表があった。

アンケート調査で興味を引いたのは、人的教育環境である学校規模や加配教員配置状況と全国学力・学習状況調査の結果をリンクさせたり、学力のみならず楽しい学校生活ができるようにするためのマンパワーの効果的な活用のあり方を分析したり、「数値化」「見える化」を行ったことである。

その後のグループ討議・発表では、授業改善につながる教員のよさ・強みを生かす教科担任制、校長としてトラブルに対する初期対応、担任を意図的に毎年替えることによる授業改善や学級経営の充実、教員の負担の見極め等学校の実態に応じた話し合いが行われた。

教職員の力を生かす。そのために日常的な打ち合わせやコミュニケーションの重要性、学校の活性化につながる人的な配置の在り方、人事評価面談の活かし方、人数を増やすだけでなく協働性をもった人材の育成等、まさしく現在求められている「チーム学校」の姿と一致する。

活力ある組織・運営の実現と校長の在り方について、発表事例をもとに、さまざまな実践を紹介いただき充実した時間を過ごすことができた。



第 3 分 科 会

評価・改善

○学校評価を、校長は学校経営にどう活かすのか

～アンケート結果からの問題提起～

尾花沢市立福原小学校 井上 信也

研究協議のまとめ

(趣旨)

北村山地区全小学校に対して学校評価に関する調査を行ったところ、ねらいや方法の多様さと共に、共通点も多いことが分かった。調査結果の分析を基に、校長がめざす学校経営の実現のために学校評価をどう活用していけばよいかを探ってみた。

(研究協議内容)

【協議1】経営戦略に対応した学校評価の使い方

分析の結果、学校評価は、そのねらいから以下の6つのタイプに類型化されることが提案された。

- ①学校評価を自校の教育活動の発信に活用する。
- ②保護者の思いや考えを知り、意見・要望に応える。
- ③保護者にも学校づくりの当事者意識をもたせる。
- ④評価結果を教職員の指導に生かす。
- ⑤トップダウン的に内容方針を示し、経営に生かす。
- ⑥職員の取組を評価項目に生かし、意識を高める。

タイプの判別を試みることによって、自校の学校評価を様々な視点から分析することができ、課題もより明確になったという感想が多かった。

①の場合、年度当初に校長が評価項目を保護者や地域に説明し、適切な評価のための情報や場を提供する、その取組こそが学校への関心と信頼を深めていく最良のPR方法ではないか。また、評価のねらいに応じて、評価内容や方法、そして公表の仕方も変えていくことが必要である等の意見も出された。

【協議2】学校評価を運営する上での諸課題

多忙化と効率化という観点からも、学校評価と人事評価をうまく連動させることが大切でないか。

保護者へのアンケートの回数も1回から複数回と多様であるが、日頃の感想や生の声も大切な評価情報であり、日常的な評価も心がけたい。

学校運営に対する保護者の自由記述に対して、個人の私見なのか全体的な意見なのかを判断して対応する必要がある、改善の視点として職員に示す場合にも活用できる、等の意見が出された。

(記録 東根市立神町小学校 長瀬 広幸)

第3分科会に参加して

山辺町立山辺小学校 會田 昭 広

第3分科会では、事前に送付されてきたアンケート結果からの問題提起という形で話し合いを行った。

分科会全員が学校評価の類型（①学校PR型②保護者対応型③学校保護者緊張型④教職員緊張型⑤トップダウン型⑥ボトムアップ型⑦その他）の中から自校の型を吟味検討し持ち寄り、尾花沢市立福原小学校井上信也校長の発表の後、4～5人ずつ5つのグループに分かれ討議を行った。

多くのグループから、やるからには効果的に行いたいという意見が出された。保護者アンケートの経年経過から良くなった点のPRや職員の改善の視点として活用したり、若い教員へのOJTとして活用したりしているという意見が出された。いずれにしても、学校の重点と評価の項目がしっかりと対応し、早めにそれを提示すること、その結果をどう活用するかの方向性を示すことにより評価をする時の観点もぶれず、きちんとした評価に繋がるのではないかな。また、アンケートを記名にするか無記名にするかや自由記述を全て公表、選んで公表、校長コメントをつけて全て公表するという方法に分かれた。さらに、校長としてアンケートを簡略化しながら教頭への負担を軽減したいという意見も聞かれた。学校規模や地域の実態によりどれがベストとは判断できないが、学校評価が形だけに終わらず保護者と学校関係を築く有効なツールと捉え、真摯に取り組んでいきたい。有意義な分科会、ありがとうございました。



第 4 分 科 会

知性・創造性

○調和のとれた子どもを育む教育課程の工夫
と校長の在り方

天童市立長岡小学校 加 藤 昭 男

研究協議のまとめ

(趣旨)

調査をもとに、知・徳・体の調和のとれた教育課程の編成の重点の置き方や、編成手法について提言を行った。提言をもとに「直接主導の改善」「職員の聞き取りをして改善」「従前の反省を生かした改善」等を観点に、校長の関わりを協議する。

(研究協議内容)

■学力、児童、地域課題等、改善に結びつけるための教育課程編成手法についての協議

- ・職員自身が課題に気づき課題に対して主体的に動けるようにしていくこと
- ・全体のみでなく主任層への働きかけが必要なこと
- ・改善に対しては保護者や地域にも丁寧な説明、発信をしていくことが必要なこと
- ・改善点についてはPDCA（点検活動）サイクルを短くして、職員の意識を高めること
- ・地域と取り組む活動の協力体制・時間等の変更は、時機を見て時間をかけ丁寧に進めること等、編成手法について共通したことが話し合われた。

■校長の教育課程編成力を高めるための情報交換が大切であるとの提言を受けた協議

手法や課題を学び合い、編成や実施にあたっての校長のセンス、肌感覚を学び合い磨くことが大切である。例えば、変更が急がれる教育活動は年内にも変更し、試行の反省を次年度につなげる等、思い切った校長の姿勢、学ぶことが多い協議となった。

■新しい赴任先で教育課程の編成について注意していることの協議

- ・前任者からの引き継ぎを大切に、内容を職員と確認し、新しく赴任した職員とも話し合おうこと、明るく希望を持って校長の思いや願いを日常的に語っていくこと等、丁寧に編成を行う校長の姿勢が話し合われた。

(記録 山辺町立相模小学校 犬石 秀実)

第4分科会に参加して

新庄市立升形小学校 早 坂 祐 司

第4分科会では、東村山地区を代表して加藤昭男先生の発表がありました。調和のとれた子ども像を図式化し、知性と創造性の関わりや知・徳・体の教育課程の柱を大変わかりやすく示し、教育課程に工夫や改善を加えた事例を数多く紹介していただきました。項目ごとに、とてもよく整理され参考になりました。最後の提言についても、校長同士の十分な情報交換の必要性等、これからの学校経営へ大きな示唆を与えていただきました。

その後、協議の柱を①「教育課程編成で見直しを図るときに大事にしていること」と、②「校長としての1年目の学校でどのように教育課程の提案改善をすすめるか」について、真剣かつ活発にグループ協議・全体交流が行われました。グループ協議の中では、次のようなことが意見交流されました。

- ・大事にしたいのは、どんな子どもを育てようとしているのか、課題は何か、校長としてのメッセージを伝えること。
- ・スクラップ&チェンジという発想と、やっていることへの意味づけと価値づけを校長がすること。
- ・1年目は浸み込ませるという関わり方でメッセージを明るく伝えていこう。「絶対よくなる」を発信。

今回、知性・創造性の分科会に参加して、情熱溢れる各地区の校長先生方の話を聞きながら、使命感のあるリーダーシップの大切さを強く感じることができ、大変有意義な研究協議となりました。



第 5 分 科 会

豊かな人間性

○豊かな人間性を育む教育の推進と校長の直接、間接的な関わり

酒田市立内郷小学校 志 田 道 広

研究協議のまとめ

(趣旨)

「生きる力」の根幹を成す豊かな人間性の育みという課題に向け、道德教育と人権教育を窓口到校長のあるべき姿を模索した取組を踏まえ、校長として直接子どもたちに何ができるか、間接的な手法でどう働きかければよいか、それらを推進する上でどのような環境づくりを心掛けるのかについて探る。

(研究協議内容)

《協議の柱① — 校長のあり方や関わり方》

- 子どもや保護者、地域の方々、教職員に対して、校長としてのビジョンを明確に示し、思いを共有することが大切である。直接的又は間接的な手立ては多様であるが、その推進にあたって校長自身の姿勢（人間性）がモデルとして感化力を持つことを深く意識したい。
- 子どもとの関わりも教職員との組織づくりも校長の「コミュニケーション」と「リーダーシップ」が鍵である。自尊感情を育むことを基盤に、前向きな目標設定で楽しい集団づくりを進めることがプラス方向のエネルギーを生むと考える。

《協議の柱② — 次の一歩》

- 組織的に取り組むため教職員同士が支え合い達成感や一体感を共有できる関係づくりを進めることが大切である。その際、ねらいや評価の観点がぶれないよう校長の高い指導力が必要である。
- 子どもの人間性を育むために指導者たる教員の力量向上が不可欠である。生活や行事、授業等の場面の中に子ども同士の学び合いや評価し合う場を設定する等具体的にテーマを絞ってOJTを進める等の工夫も必要である。
- 家庭や地域、小中連携の取組の中で子どもの育ちを語ることが大切である。その際、学校支援地域本部事業等の活用も有効である。

(記録 酒田市立広野小学校 佐藤 亨)

第5分科会に参加して

米沢市立六郷小学校 小 林 知可志

豊かな人間性を育む教育は、広範囲であり、教育活動全体だけでなく、家庭や地域も含めた子どもに関わる全ての生活である。提言内容は、校長講話や児童との対話、道德の授業や人権教育、家庭・地域への情報発信等、校長の直接的、間接的な関わりをテーマにしたものであった。提言内容から、自校での実践内容を振り返り、校長としての役割や関わり方を考えることができた。

豊かな人間性を育むというのは、子ども達が、よりよい人間関係を持てているかが問題であり、たとえ家庭や地域で豊かな人間関係を持っていない子どもでも、学校がよりよい人間関係の中で楽しい場所であるならば豊かな人間性を育めるものと考えます。つまり、子ども達が豊かな人間関係の中で育てば、人間性豊かな子どもが育つはずである。

分科会では、各学校の特色ある活動や校長としての児童・職員への関わり方が話し合われた。その中でも、「校長としての教育ビジョンをどう職員や児童に伝え、共有して実践していくか」が学校経営上大切であることについて深く考えさせられた。

これらの議論の中で、豊かな人間性を育むことについて、校長の役割の大きさ、関わり大切さが実感できた分科会であった。

分科会運営や、時間の配分についても適切で、十分満足できたものであった。発表者、運営関係者等に感謝したい。



第 6 分 科 会

研究・研修

○教員の指導力向上をめざした校内研修の推進と校長の役割

戸沢村立戸沢小学校 市 川 重 保

研究協議のまとめ

(趣旨)

学校の教育力を高めるには、教職員一人一人の担任力（実践的指導力）の向上を図るとともに、課題解決に向けて機能する教職員集団を育成することが大切である。本分科会では、担任力を高め、課題解決に向けて機能する教職員集団を育成するための校内研究・研修体制の構築と校長の果たすべき役割を明らかにしていく。

(研究協議内容)

1 教員の研修意識をいかに高めていくか。

- 研修の必要感をいかに持たせるかがポイントである。そのためには、日常のコミュニケーションが重要である。人事評価を活用した主体的な目標設定も研修意欲の高揚につながる。
- 若手育成のために、意図的にベテラン教員を関わらせることが相互の研修意欲を高めることにつながる。校内の指導（研修）体制をいかに構築していくかが校長に求められる。
- 校長と教職員の意識をそろえることが大切である。そのために、企画委員会は重要である。時には、子どもの実態を数値で語ることも必要である。

2 教員同士の学び合い（同僚性）をどう日常化していくか。

- 同僚性を生み出すためには、仕事の負担軽減を図り教職員のゆとりを作ることが重要だ。具体的な方策として、高学年の教科担任制、複数体制での保護者面談、校務分掌の入れ替え等々がある。
- 学年や学年ブロックの活性化がポイントになる。互いにサポートし合える組織の構築という視点で、キーマンに対する校長の働きかけが重要になってくる。
- 具体的なデータ（実態）を示しながら課題意識を高めていくことも必要である。

(記録 最上町立富沢小学校 下河辺敏弥)

第6分科会に参加して

山形市立南沼原小学校 渡 邊 和 浩

今回の発表は、学校教育活動の成否につながる中核的な課題であり、大量退職時代に突入した今、ミドルリーダーを育成するとともに、若手教員にベテラン教員の持つノウハウをいかに引き継いでいくかは、まさに喫緊の課題である。

このような現状を踏まえ研究された、最上地区校長会の発表は、学力向上と特別支援教育を校内研修の柱と位置づけた豊富な実践や提言等、大変示唆に富む内容であった。中でも、学力向上に向けた同僚性を高める工夫や、目標・取組・ゴールを明確にした経営方針の共有化、特別支援教育充実のための専門機関との連携や外部講師を招聘しての校内研修の充実等は、大いに参考にしていきたい。

グループ協議では、①「教員の研修意識を高めていく手立て」と、②「ベテランの良さを生かす教員同士の学び合い」について話し合った。

私のグループでは、①については、教員の必要感を高めていくことが何よりも重要で、そのためには、自己設定の目標を立てさせること、適宜の面談等で意欲を継続させていくことが重要であろうということ、②については、学年ブロックの活性化のための学年主任のサポート体制の構築、若手が相談しやすい雰囲気醸成等が大切であろうということ等が話し合われた。

若干時間をオーバーしてしまうほど、充実した意義ある話し合いであった。



第 7 分 科 会

学 校 安 全

○子どものいのちを守る学校安全と校長の在り方

～職員の危機意識の維持・向上にかかる校長の一手～

白鷹町立東根小学校 船 山 彰 博

研究協議のまとめ

(趣旨)

安全教育と安全管理は、校長のリーダーシップのもと、組織の一員として全教職員が行っており、職員個々が高い危機意識を持つよう、効果的な校長の一手が求められる。職員の危機意識の維持・向上に資するため、「いつ、何を、どういう場で、どのように」手だてを講ずるか、校長の果たす役割について探っていく。

(研究協議内容)

協議1 【危機発生時の未然防止、危機発生時の迅速・的確な対応のために、どのようにして職員の危機意識の維持・向上を図ればよいか。】

○職員の危機意識は、最悪を想定する想像力であり、少しでも不審に感じたら迷わず110番することが大事である（警察の指導）との話で、職員の危機意識が急激に高まった。

○まずは、教頭・主幹教諭・教務主任等の学校経営の中核になる職員の危機意識を高めることが、校長の最初の一手である。

協議2 【学校安全における危機予防のために、どのように意図的・計画的な指導や機を捉えた指導を行えばよいか。】

○機を捉えた指導は危機意識を高める有効な手立てであるが、職員会議等での職員一人一人が経験した「ヒヤリハット」を紹介し合い共有することも効果的である。校長からのトップダウンではなく、職員が主体となってお互いに危機意識を高め合う仕組みを作ることが校長の一手である。

○子どもの危機予防力を高めることも必要である。子どもに考えさせる機会や事後指導を大切にするとともに、職員の子どもへのおろし方についても確認していくことが大切である。

(記録 白鷹町立蚕桑小学校 竹田 典克)

第7分科会に参加して

村山市立大久保小学校 石 川 重 美

東日本大震災の復興もままならない時に熊本の大地震が起きてしまいました。原因に活断層があると考えられていますが、日本中のどこにでも活断層は存在すると思った方が現実的のようです。いつどこで起こるか分からないのです。危機は地震だけではなくありません。自然災害、交通事故、不審者……挙げればきりがありません。

校長はこのような危機に対してどのように対応していけば良いのか、考えさせられた分科会でした。

まず、危機が起きないような対応です。地域を巻き込んだ組織で子どもを守ること。校長自身が想像力を働かせて巡視すること。また、適切な情報を収集して職員に危機を学ぶ意識を高めていくことが重要であると感じました。各学校に様々な対策マニュアルがありますが、役割分担を果たすことで満足していないのか、子どもの命を守るための役割分担であって、役割を果たすことが目的になっていないのか、目的と手段が逆転していないのかを職員全員に考えさせることが大事だと感じました。マニュアルに「魂」を吹き込むのが校長の役割です。

また、万が一危機が発生した場合、被害を最小に食い止めるためには、学校の限界を自覚して警察署・消防署等の外部組織に迅速に助けを求めることも大事だと感じました。常に危機意識を持つことが校長の重要な仕事であると深く自覚した研修でした。関わった方々に深く感謝いたします。



第 8 分 科 会

健 全 育 成

○「だれもが行きたくなる学校づくり」
における校長の役割

～ “米沢市全体で取り組む学校づくりプロジェクト” より～

米沢市立塩井小学校 徳 間 健

研究協議会のまとめ

(趣 旨)

一人一人の児童理解を進め、教職員で情報を共有し、課題解決や改善に向けて組織的な教育活動の展開を図り、すべての子どもにとって安全で安心な居場所となる学校を目指していくことが求められている。本分科会では、子どもの健全育成を阻害する課題を予見し、いじめや不登校等を生まない学校づくりの推進の在り方を明らかにする。

(研究協議内容)

《協議の柱》

◎いじめや不登校を生まない“だれもが行きたくなる”学校づくりのために、校長はどのようなリーダーシップを発揮すべきか。

《協議内容》

○校長がリーダーシップを発揮し、担任力向上を推進する組織づくりをするために

- ・教職員をやる気にさせる体制づくりを整える。
(ベテランと若手をつなぐOJTの活用等)
- ・教職員との対話を通して、職員理解に努める。
- ・小さなことから情報共有し、迅速な組織対応ができる校内体制を整える。
- ・児童理解の手立て(アセス、Q-Uの活用)を学校全体で研修し、学習指導や生徒指導等で生かしていく。(行政や幼小中の連携)

○校長がリーダーシップを発揮し、一人一人の子どもの学びの保障をするために

- ・行政と校長会が連携し、発達障がい等の支援体制を推進する。(支援員の配置等)
- ・新採教員の校内支援体制の整備を図る。
- ・一人一人の子どもが認められる学校づくりを推進する。(わかる実感がもてる手立て、朝や放課後等を活用した補習の取り組み等)

(記録 米沢市立三沢西部小学校 神保 雅寿)

第 8 分科会に参加して

酒田市立宮野浦小学校 阿 彦 裕 光

第8分科会では、米沢市小学校長会の取組として「だれもが行きたくなる学校づくり」における校長の役割～米沢市全校区で取り組む学校づくりプロジェクト～と題した研究発表を徳間健先生より詳しく説明していただきました。学校への不適応を示す子どもの増加や教職員の年齢構成のアンバランス等米沢市の抱える課題を解決すべく、市内全小中学校で取組が行われたとのこと。上記の課題については、県内どの地域でも共通の課題で、勉強になったことは、行政と連携しながら、きちんとした予算の裏付けや大学教授を招聘し、理論構築をした上での研究発表であったことです。また、各校のミドルリーダーが「教員研修プログラム」を延べ108時間も受講し研修を深めると共に、各校に持ち帰り、報告・伝達し、実践に繋げていること、さらには、快く研修に出す職場の温かさを感じました。

4人×3グループの少人数での話し合いでしたが、各校児童の健全育成の取組について情報交換することができ、たいへん有意義な時間を過ごせました。分科会の最後には、3グループでの話し合いの報告があり、どれもが頷けるものばかりでした。さらに、司会者より分科会を4つの“つ”でまとめていただき、心に残る第8分科会でした。①つとめる(努める)：理解を深める、やる気にさせる②つなぐ：小・小・中、行政③つづける：継続こそが重要④つくりあげる：やらされるのではなく、みんなでの気持ち。



第 9 分 科 会

健康・環境

○社会や生活環境の変化に対応する
健康教育の推進と校長の在り方

川西町立玉庭小学校 青 山 雄 二

研究協議のまとめ

(趣旨)

近年の生活環境の変化、とりわけ携帯端末等の普及に伴うメディア接触の増加は、子どもたちの健康や人間関係に大きな影響を及ぼしている。

本分科会では、「未来を生きる基盤となるセルフコントロール力」の育成をめざす健康教育の在り方を探る。

(研究協議内容)

- 1 社会や生活環境の変化に伴う子どもの変化を、校長としてどう把握していくか。
 - ・川西町では、養護教諭部会のレポートからメディア接触による問題について危機感を持ち、本研究に取り組んだ。校長は、子どもの変化を見取る感性を鍛えていかなければならない。様々な面から情報を得る等学んでいかなければならない。
 - ・実態を数値で表すことで客観的に把握できる。さらに、記述式で理由を聞いたり、親の実態を把握したりすることで、より課題が見えてくると思われる。
- 2 把握した課題に対して、校長としてどういう道筋で解決していくか。
 - ・川西町では、実態把握を行い、できることから取りかかった。小中連携し、多方面から取組がなされている。関係機関との連携で効果が上がる。
 - ・始めから禁止や制限について考えるのではなく、メディアリテラシーから入ることで、主体的に取り組めるようになる。
 - ・職員に共通課題としての意識を持たせ、ミドルリーダーを育成し、OJTの機会にしていきたい。
 - ・親の成長を促すのも校長の役割である。子どもの面倒を見ている祖父母に対しても学ぶ機会を作ることが大切になってきている。児童会自ら声を挙げて取り組むような手立ても考えていきたい。

(記録 川西町立大塚小学校 中川 栄子)

第9分科会に参加して

上山市立宮川小学校 吉 田 康 之

未来を生きる力を育む健康教育を推進するための校長のあり方をさぐるべく、「社会や生活環境の変化に対応する健康教育の推進と校長の在り方」をテーマに協議が進められました。川西町の小中学校長会による児童生徒のメディア接触の実態調査を基にした発表は、昨今の学校を取り巻く大きな課題に正面から向き合っただけでなく、まさに時宜を得た発表であると実感しました。具体的かつ多方面からのデータ分析と継続的な取り組みによる年度間比較等も大変参考になりました。

グループ討議では、「社会や生活環境の変化に伴う子どもの変化を、校長としてどう把握していくか。」「把握した課題に対して、校長としてどういう道筋で解決していくか。」という協議の柱について、活発な話し合いがなされましたが、中でも特に、問題が中学校で噴出したときには、手遅れ状態になってしまうケースがあり、その芽は小学校の3・4年生段階から発しているという事案や教職員以上にメディアリテラシーに長けた児童の実態が見え隠れするという話題に及び、現実に対応が急がれることを実感いたしました。更に、子どもたちを取り巻く心身の健康推進に関わる問題は、学校だけでは立ちゆかないところがあり、PTAや外部機関との連携が不可欠であることも再認識いたしました。今後の取組に示唆を与えていただいた有意義な協議の場となりましたことにあらためて感謝いたします。



第 10 分 科 会

自立と社会性

○信頼に応える特別支援教育の推進と校長の役割

鶴岡市立上郷小学校 松 田 裕 可

研究協議のまとめ

(趣旨)

すべての人々が相互に人格と個性を尊重し合う社会の実現に向け、その基礎形成のため、子ども達とともに生活し、互いに尊重し合う感性を育みながらも、特別な支援を必要とする子ども一人一人には、それぞれの教育的ニーズを把握し、適切な指導及び必要な支援を行うことが求められている。本分科会では、特色ある学校経営の中に共に生きることを目指した学習の場を設定し、自立を図るための特別支援教育の推進の在り方を明らかにする。

(研究協議内容)

研究の柱①：限られた条件のもと、コーディネーターを中心に組織的に機能する特別支援教育の体制を充実させるにはどうすればよいか。

- だれをコーディネーターに指名するのが重要である。また、コーディネーターの複数指名や仕事の内容を明確にすることも大切である。
- 学校教育支援員等の配置を、可能な限り充実させていくことが必要である。
- 専門家チームによるスクリーニングの結果を、どのように担任や保護者に伝え、有効に活用していくかが重要である。

研究の柱②：校内における特別支援教育への理解をいかに深め、次代につなぐ人材をどのように育成すればよいか。

- 校内の特別支援教育の体制について、まず校長が方向性を明確に示していくことが大切である。
- 校内研修で知識や経験のある職員から講師になってもらい、保護者面談の仕方や支援計画の引き継ぎ方等について研修を深めることが必要である。
- 各校にスペシャリストや検査を実施できる職員が配置されることが理想である。

(記録 三川町立横山小学校 平賀振一郎)

第10分科会に参加して

大江町立本郷東小学校 佐 竹 伸 一

第10分科会では「自立を図り社会性を育てる教育の推進と校長の在り方」という研究課題について、特別支援教育の推進の在り方に係る発表とグループ別の協議が行われた。

田川地区の「信頼に応える特別支援教育の推進と校長の役割」についての発表では、地区内の特別支援教育に係る現状が報告された後、「実態に応じた校内体制組織の構築」「今後に向けた計画的な人材の育成」「新たな課題に向けて」という3つの観点から、それぞれの実践事例についての紹介がなされた。特別支援教育コーディネーターを活かすための工夫や育成のための手立て、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり等について多くのことを学ばせていただいた。

グループ別協議では、特別支援教育の体制を充実させるための工夫と人材育成の在り方について話し合われた。体制を充実させるためには、校長自らが方針を示しつつ関わり方を工夫していく必要があること、コーディネーターの配置を工夫し役割と分担を明確化する必要があること等が話し合われた。人材育成については、研修機会や内容の充実、管理職の特別支援教育に対する理解の深化が必要であること等が話し合われた。

田川地区の充実した研究成果の発表と、活発で和やかなグループ別協議での学びは多く、校長として果たすべき役割を確認することができた。





開会の挨拶



閉会の挨拶



第1分科会



第2分科会



第3分科会



第4分科会



第5分科会



第6分科会



第7分科会



第8分科会



第9分科会



第10分科会